

## セッションII ヨーロッパにおける日本美術史の成立と発展 —フランス及びイギリスの主要な日本美術コレクション の果たした役割— 2007年7月8日(日)

### 生成し続ける歴史

#### ロール・シュワルツ＝アレナレス\*

国際日本学シンポジウム第2セッションは、学問の一分野としての日本美術史の誕生において、フランス及びイギリスの主要な日本美術コレクションが果たした役割について考察することを目的に設定された。この広範な問題提起に伴う動機や方法論を紹介する前に、このテーマが日本学者や美術史家の間ではすでに大きな関心事となっていることに留意したい。20年ほど前から盛んになっているジャポニズム研究関係の出版や展覧会によって、今日ではその進展と成果をより明確に把握することができるようになり、19世紀末よりヨーロッパで見られる浮世絵や建築、装飾美術に関する記述、これらに対する関心、あるいは情熱は、フランスや、イギリス、日本においても、現在では比較的良好に知られたテーマとなっている。

日本美術史誕生にまつわる問題について、我々の知識を深めることに大きく貢献してきたこれまでの研究を、ここですべて紹介することはできないが、万国博覧会の歴史や日本美術のための最初の美術館や書物、それに関連した美術品コレクターや美術評論家、研究者らの役割といったテーマに取り組んだとりわけ優れた研究活動のうち、例えば1999年に東京国立文化財研究所の主催で20名ほどの美術史家が集まって行われた国際シンポジウム（「今、日本の美術史学をふりかえ

る」）は、先駆的なものであった。同研究所はまた、1997年に『明治期万国博覧会美術品出品目録』を出版している。また、エディション・シナプス社より出版された馬淵明子監修のシリーズ『ジャポニズムの系譜』も特筆に値する。馬淵氏の優れた著書の内、『1990年パリ万博のために編纂された、日本人自身による初めての日本美術史』や、ルイ・ゴンスの『日本美術』、ウィリアム・アンダーソンの『日本絵画芸術』の解説も挙げられる。

一方クリストフ・マルケ氏は、本シンポジウムの講演でも紹介された、1990年の万博におけるエマニュエル・トロンコワの役割についての研究の他、1998年に日仏会館で行われた、アンリ・チェルヌスキに関するシンポジウムの責任者も務められた。チェルヌスキは、政治家、金融家でありながら、アジア美術のコレクターでもあった人物である。

そして、著名なジャポニズム研究者であるガブリエル・ワイズバーグの監修で2年前に行われた展覧会、「アール・ヌーボー：ラ・メゾン・ビング (*L'Art Nouveau : La Maison Bing*)」のカタログ、また昨年日本女子大学で行われた国際シンポジウム「林忠正—ジャポニズムと文化交流への貢献」の議事録、あるいはブリジット小山氏、尾本圭子氏、フランシス・マクワン氏らの著書は、林忠正、ジークフリート・ビング、エミール・ギメといった、日本とヨーロッパの芸術交流の中で大きな役

\*お茶の水女子大学 准教授

割を果たした人物らの重要性を確認させてくれるものである。

こうした研究を基にし、またコレクションやコレクターの特殊な役割やその内容を評価しながら、本シンポジウムでは日本美術史の誕生に関するテーマを扱うこととなった。

1939年に出版された『まなざし』(*Le Regard*)というタイトルの著書の中で、フランス国立美術館(Musées de France)のディレクターを務め、またフランス国立東洋美術館の学芸員であったジョルジュ・サルは、コレクターと美術品、美術館相互のダイナミックな関係性について、次のように述べている。

我々のコレクションに大きな魅力を与えているのは、これらが特別な努力の産物であるという事実である。ここに所有されている作品は、単にそれらが生み出された時代の趣味を反映しているだけではない。それらを見出した時代、それらを調査した学者、それらを獲得した王族、そしてそれらを常に再評価し続けた美術品愛好家らの証人でもあるのだ。一つの作品には、それに人生をかける、遠近からの数多の眼差しが交差しあっているのだ。

筆者自身、ルーブル美術館極東美術コレクションの最初の学芸員であった偉大なコレクター、ガストン・ミジョンについて現在研究<sup>①</sup>をしているが、これによりミジョンと日本の美術品の関係性、またルーブル美術館に導入された日本美術がいかに新しい地位を得たか、そして他の作品、他者の視線と接することでいかに変容したかという問題についてさらに追究しているところである。

ルーブル美術館の最初の日本美術コレクションは、王侯貴族のかつての所有物を継承しつつ、またコレクションに寄贈した当時の日本美術愛好家の趣味を反映したもので、いくつかの例外を除け

ば、江戸時代の陶器、漆器、青銅製品、浮世絵によって成り立っていた。したがってコレクションに仏像や古代の美術品が加わるには、1900年のパリ万博で、古い時代の壮麗な日本美術が突如としてフランス人の目の前に現れるのを待たなければならなかった。

ルーブル美術館の日本美術コレクションが、フランス人、あるいは広く西洋人にどのように受け入れられたかを理解するためには、これらが最初に美術工芸品部門の展示室に並べられたという事実も無視できない。日本美術が独立した部門として確立するのは1930年のことで、戦後、1928年に国立東洋美術館としてリニューアルされたギメ美術館に最終的に収蔵された。日本美術がルーブル美術館に導入されたのは1893年、まさに美術工芸品部門が公的に設置された年で、フランス王国の最も古く、最も神聖な作品の横に展示されることになったのである。フランスにおける日本美術史の誕生という観点からみると、その誕生の最初の数十年間、ルーブルの中でヨーロッパの美術工芸品と隣り合わせに置かれたという事実は、今日ではしばしば忘れられているが、非常に重要な点であると考えられる。極東美術とヨーロッパ美術の新しい出会いから生まれた比較研究的なアプローチは、作品の素材、歴史、芸術性といった特性に関する綿密な知識の上に立つものであり、それはおそらく日本美術に対する最初の理解を容易にし、フランスにおける日本美術史の始まりに、方法論的な方向付けを与えたと言える。

ヨーロッパにもたらされ、評価され、公開され、保存された美術品に対する、直接的で緻密な調査と解釈に立った研究法は、美学、歴史、社会、政治面からといった多様なアプローチを反映しつつ、具体的かつ相対的な見方で作品の実態に向き合わせるものである。ヨーロッパにおける日本美術史の誕生という観点から見た場合、フランスやイギリスで、東洋研究の長く確固とした伝統と日本趣味の流行との決定的な出会いがあったのは、19

世紀の最後の数十年間であったが、フランスにおける江戸時代の画譜の受容についてのクリストフ・マルケ氏の先駆的研究や、マリー・アントワネットの漆器コレクションについての永島明子氏の基盤的研究が示しているように、この歴史の前提となった事柄や具体的データを探り、江戸時代やそれに続く時代の中で、いかにして最初の書物や図版資料が広まり、受け入れられ、使われたか、そしてこの最初の出会いがどのようにその後の美術史の発展に影響したかを追及することは、非常に意味のあることである。

このセッションでは、コレクターと美術作品の関係性を詳細に取り上げると同時に、こうした美術品が時空を超え、様々な視線や文化に触れながら、これらを受け入れる美術館の中でいかにして異なる意味合いや価値を得るようになったかを追究することが問題となる。鈴木廣之氏、彬子女王殿下、ニコル・ルーマニエール氏の発表は、フランスやイギリスでの日本の美術品の獲得を促し、これらの国々で日本美術部門を創設させ、さらにヨーロッパや日本に学問の一分野としての日本美術史を成立させた状況やその目的について、明らかにするものである。本テーマに関して著名な専門家である鈴木氏は、こうした視点から見た場合の、アーネスト・フェネロサやウィリアム・アンダーソン、アーネスト・サトウといった人物の日本長期滞在の重要性を指摘し、彬子女王殿下は、未刊の資料の分析を通して、大英博物館日本美術部門の核を成すウィリアム・アンダーソン・コレクションの歴史をたどる。ルーマニエール氏は、多くの作品を紹介しながら、同博物館において、とりわけオーガスタス・ウォラストン・フランクス の貢献により、いかにして日本の陶器コレクションが形成されていったかを紹介する。

このシンポジウム議事録によって、こうしたテーマに関する知識が深まり、そして、この変化し続ける美術品とその受容の歴史の中で、新たな研究の道が開かれることを願っている。

## 追記

このセッションは、科学研究費補助金（基盤C）（研究課題：「ガストン・ミジョン、ルーブル美術館初の日本美術コレクション学芸員」）の一環として開催された。

本セッションの運営にご協力いただいたお茶の水女子大学学生の方方真由子氏、内山尚子氏、堀切春水氏に、この場を借りて感謝を申し上げたい。

## 【注】

- ① この研究は現在、科学研究費補助金（基盤C）（研究課題：「ガストン・ミジョン、ルーブル美術館初の日本美術コレクション学芸員」）の下に行っている。このテーマについては、すでに『ガストン・ミジョン（1861-1930）、ルーブル美術館極東美術コレクション初代学芸員—日本滞百周年にあたりその業績を振り返る—』（日仏美術学会25周年記念シンポジウム「美術史におけるフランスと日本」お茶の水女子大学比較日本学研究センター研究年報2007年）で取り上げている。